

「ちょっといいが
そこにある」
羽曳野



このまちは大阪市内から電車でたったの 20 分。
でも降り立てば、
のんびり流れる時間と、四季を感じる自然、そして歴史ある景色が出迎えてくれる。

便利さもあるけど、せかせかしていない。
都会すぎず、田舎すぎず。ちょうどいい暮らしが、ここにはあります。

ぶどうにいちじく、おいしいワインや焼き肉。
地域に根ざしたおいしさが、ふだんの食卓をちょっと豊かにしてくれる。

子どもたちはのびのび育ち、おじいちゃんおばあちゃんも生き生き。
地域のつながりが、誰かの安心や笑顔につながっている。

このまちは、派手じゃないけど、
気づけば好きになっている「ちょっといい」が
あちこちにちりばめられています。

ふだんのまち、ふだんの暮らし。
その中にある「ちょっといい」を、
これから、このまちで暮らす人たちと一緒に見つけていきます。



祖崇神

神楽に込める祈りと誇り ～羽曳野の土地に息づく伝統とロマンを受け継ぐ～

長い歴史を持つ誉田八幡宮と神楽

誉田八幡宮は、応神天皇陵後円部に鎮座し、千年以上の時を超えて、この土地の人々を見守り続けてきました。この神社で古くから受け継がれているのが、神前での「神楽」の奉納。祈りの音色と舞を通して、目には見えないものへと想いを捧げる神事は、今も地域の人々の心を結ぶかけがえのない存在です。この神楽に深く関わり、地域文化の継承に力を注ぐ、^{ざこう}雑喉泰行さんと南香里さんのおふたりに伝統への誇りを伺いました。



雑喉泰行さん



南香里さん

神楽とともに歩む日々

羽曳野に生まれ育った雑喉さんは、子どもの頃から誉田八幡宮の境内で遊び、だんじり祭りにも関わってきました。日本古来の音楽で日本の素晴らしさを伝えていきたいと雅楽の道を学び、今年で11年目を迎えるといいます。「雅楽は、世界最古で最高のオーケストラだと思います。」演奏の相手は、人ではない。「見えない何か」への祈り。「自宅に防音室を作り、仕事の合間に練習しています。自分が演奏する音色が、地域の人々にとって神楽を身近に感じてもらう一助になればと思って。」雑喉さんは語ってくれました。

伝統が日常生活に「あるもの」として存在している

また南さんも神楽に深く関わっています。彼女は高校生のころから神楽の舞に惹かれ、現在も「富永流浪速神楽」の稽古を続けています。「誰かがやっていかないとなくなってしまうという思いがあり、私自身も知らなかったのが特に若い世代にこういう世界もあるよと知ってもらいたいと考えています。羽曳野では、だんじりを含め、神社や伝統文化が日常生活に「普通にあるもの」として存在している。他の地域ではだんじりや神楽の文化が珍しがられることも多いように思います。」と話してくれました。

歴史の上に暮らすということ

ふたりとも口をそろえて言うのは、「ここに生まれてよかった」という思いです。

「羽曳野には、何百年も前からここにあるものがいっぱいあります。それが私たちにとって、誇りであり、何よりも大切な“場所”なんです。」

羽曳野市には、日常の風景の中に歴史が息づいています。古墳がまちのいたるところにあたり、かつて遣隋使が通った道がそのまま残っていたり。

「このまちは“ロマンの里”だと思うんです。歴史は博物館じゃなくて、暮らしのすぐそばにある。」神楽や祭礼の営みは、そんな歴史の延長にある“生きた文化”。そして、それを受け継ごうとする人々の姿が、このまちの未来を静かに照らしています。

それは、神楽の響きが止んだ後も変わらず、神社に、地域に、そして人々の心に息づいていました。



このまちで育つ、心と命の学び ～自然と地域がつくる、子どもたちの「生きる力」～



羽曳野市では、地域とともに歩み、子どもたち一人ひとりの心を豊かにする、特色ある学校教育を進めています。今回はビオトープづくりを通じた自然との触れ合いから“生きる力”を育もうと取り組んでいる西浦東小学校の植田教頭先生に、自然の中で子どもたちがどのように命の大切さを感じ、共に生きる力を養っているのかをお聞きました。

自然が教える、生きた学びの場

西浦東小学校では近くを南河内最大の河川である石川が流れ、豊かな自然が残る環境を活かして子どもたちに教科書だけでは学べない“生きた学び”を経験してもらいたいとの思いから、昨年からはビオトープづくりに取り組んでいます。

ビオトープづくりは羽曳野市の施策である“特色ある学校づくり推進事業”として始まりました。もともとこの辺りは昔は蛍が飛び交っていたといわれるほど豊かな自然があり、こうした環境や生物との触れ合いを身近に感じてもらうことで、子どもたちに新たな気づきや地域への誇りを持ってもらいたいと思ったことがきっかけです。



みんなで創る、未来の自然教室

校内のこんもりと茂った森を整備してカブトムシの飼育を行うカブトムシハウスや、水田を含むビオトープを作りました。これには地域の方々も参加して頂き、学校と地域で協力して作り上げたものです。

今では、水田に色々な水生生物が見られ、ハウスではカブトムシとクヌギの木と一緒に観察できるようになりました。また、里親制度で子どもたちが幼虫を家庭に持ち帰って観察記録をつけながら育てることもしています。

西浦東小学校
植田昌宏 教頭



つながる心、広がる想い、この体験が未来を変える

また近隣の幼稚園児を招待して自然観察会を実施して、子どもたちが自分たちが園児にビオトープの説明をするなど小学校の外にもその活動が拡がり学校が地域の交流の場にもなってきました。

こうして自然と触れ合い、新しい発見をする中で、子どもたちにも大きな変化が見られます。

米作りの中でたくさんの作業を体験して「ご飯を感謝して食べるようになった」という声が出てきたり、ビオトープの運営にも子どもたちが独創的なアイデアを出してくれるなど、羽曳野の地域と自然を“教室”にすることで子どもたちは生きる力を育んでいます。

こうした体験は子どもたちの未来にきっと役立つでしょうし、こうした取り組みを地域の方々とも協力して残していきたいと思っています。



甘くみずみずしいイチジクが並ぶマルシェの朝



地元の人たちの笑顔が交わされる風景は、このまちの“ちょっといい”を象徴しているようです。このマルシェを主宰するのは、羽曳野市で「藤井農園」を営み、町おこしにも取り組む藤井貫司さん。農家がまちを元気にする、ちょっといい挑戦。マルシェに込めた想いを伺いました。

みんなで力を合わせて、成長していきたい

このマルシェを支えているのは、「はびきの農家の煮こみ会」という、地域に根差した農家の集まりです。初めは3軒の農家から始まったこの会も、今では8軒の農家が集まり、地域と協力し合いながら農業の枠を超えた活動を展開しています。

「煮こみ会」のメンバーは困った時にはすぐに相談できる環境を大切にしています。「みんなの情報交換の場になっていて、ノウハウの共有や新規就農者にとっては相談もでき、農作業の互助など本当に助け合える仲間です。みんなで力を合わせて、成長していきたい。そしていいものを作って

お客様に届けたい。」と藤井さんは笑顔を見せます。そんな仲間たちとの協力が、農業経営の自立と地域とのつながりを生み出しているのです。



地域との深いつながりを育むマルシェ

毎月開催されるマルシェでは、農産物が並ぶだけではなく、農家と消費者が顔を合わせる貴重な機会が提供されています。藤井さんは「自分たちの作ったイチジクや他の農産物を直接届けられることに、すごくやりがいを感じています。お客様がリピーターになって下さって雨の日でも来てくれ

ることが、私たちのモチベーションに繋がっています。」と嬉しそうに話してくれます。マルシェでのやり取りは、地域の絆を深め、農産物を通じて、まち全体が一つのコミュニティとして結びついていく感じが感じられました。



羽曳野市果樹振興会
いちじく部会長

藤井貫司さん

次世代を育む食育活動

また、煮こみ会は地域の未来を見据えた食育活動にも力を入れています。市内の小学3年生に羽曳野産の採れたてイチジクをプレゼントする「あめんぼいちじくプロジェクト」は、地域の子どもたちに農業や食文化を伝え、地元の農産物への理解を深める大切な活動となっています。

「子どもたちに自分たちが育てたイチジクを食べてもらうことで、羽曳野の農業について学び、故郷への愛着を深めてほしい。」藤井さんは優しく語ります。食を通じて地域とのつながりを深め、次世代に繋がる力を育んでいます。



大きな目標はないけれど、続けていくことが大事

「煮こみ会」の活動には派手な目標はありませんが、続けることが何よりも大事だとメンバーたちは言います。マルシェを継続的に開き、地域とのつながりを深める活動を積み重ねることが大切だと。続けることで確実に地域の力になるという言葉には、農業への深い愛情と、地域の未来を見据えた覚悟が感じられました。

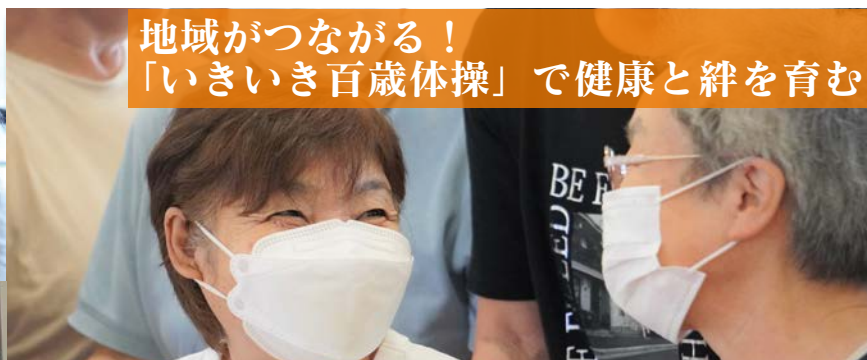


畑で実ったイチジクが、マルシェに並び、誰かの手に渡っていく。

その一つひとつのつながりの先に、まちが少しずつ変わっていく景色がある。

若手農家がまちの真ん中で動き出すとき、「ちょっといい」が重なって、大きな変化が生まれる。そんな“兆し”が、マルシェに集まっていました。

地域がつながる！ 「いきいき百歳体操」で健康と絆を育む



「おはようございます！」「よろしくお願いします！」

体操が始まる前から、元気な挨拶が響き渡ります。今回は、市内で開催されている「いきいき百歳体操」の活動を支えているグループの藤井豊子さんと、
いのさこ猪砂正弘さんのお二人に話を伺いました。

歩いて通って健康維持！「いきいき百歳体操」

この体操は全国各地で行われている健康維持のための体操で、羽曳野市内では90カ所以上の公民館や集会所で開催されています。地域の多くの方が関わって運営されており、市内で1500人以上の高齢者が参加しています。「いきいき百歳体操」は、手首や足首におもりをつけ、負荷を調整できる簡単な体操で、週に1～2回、30分間の運動を行います。無理なく続けられる内容であり、地域の「元気でいたい！」という方々が参加しています。

「無理なく、楽しく、地域とつながる」



民生委員・児童委員
古市南校区委員長

藤井豊子さん

体操が始まるまでの時間で脳トレに挑戦している方もいます。体を動かすだけでなく「体操前後の、みんなで話す時間がとても楽しみ」と話す参加者も多いとのこと。体操だけでなく、参加者同士がリラックスして会話できる場にもなっており、それが継続的な参加の原動力となっています。また、

藤井さんは「地域の方がここに來ていることで、健康状態もわかる

し、相談もしやすくなる。顔が見える場所があることはとても大切。」と話します。地域が協力して行う体操運営のサポートが、高齢者の皆さんの「外出して、体を動かし、交流する。」という心身ともに健康を維持できる環境を生み出しているのです。

男性のみの百歳体操

「men's いき百」も大盛況！

羽曳野市では、特にユニークな取り組みもあります。それが「men's いき百」という、男性限定の体操グループです。



猪砂さんは、もともと忙しい現役時代を送り、退職後に「何か地域のためにできることはないか」と考え、現在は様々な地域活動を行っています。「男性がもっと気軽に参加できる場をつくりたい」との思いから、men's いき百の立ち上げを行いました。「初回は参加者が集まるか心配だったけれど、予想以上に多くの男性が来て

くれて、本当に嬉しかった。」と笑顔で語る猪砂さん。最初は緊張感のあった参加者たちも、回を重ねるごとに徐々に打ち解け、30人以上の参加者が継続して活動しています。

地域みんなで元気になる

「いきいき百歳体操」は、単なる運動プログラムではありません。体操を通じて、地域全体で健康を支えるという大きな役割を担っています。地域で協力し合って開催され、さらに参加者が自分のペースで運動できる場があるということは、健康維持だけでなく、地域のつながり強化にもなります。

猪砂さんは「高齢者の方々にとって、ここが自分の居場所のひとつになってくれたら、嬉しい。」と締めくくってくれました。



「ブックスタート」で育む、未来への一歩

羽曳野市中央図書館
藤井逸郎館長

子どもの成長に欠かせない「読み聞かせ」。その大切さを早い段階から実感してもらおうと、図書館が始めた「ブックスタート」事業。赤ちゃんに絵本を贈るこの取り組みは、ただ本を渡すだけではなく、読書の楽しさを伝えるための第一歩です。館長の藤井逸郎さんとボランティアの皆さんの思いを交えて、その魅力をお伝えします。

羽曳野市子ども文庫連絡会・
おはなしの森

前田泰恵さん(中)
菅谷純子さん(右)

未来のために絵本を贈る理由

「4ヶ月健診を迎えた赤ちゃんに絵本をプレゼントすることで、早期から読書習慣を根付かせ、将来的な本との付き合い方を学んでほしい。」藤井館長は、願いを込めて話します。この事業では、赤ちゃん一人一人に5種類の絵本の中から1冊を贈り、ボランティアによる読み聞かせを行います。保護者には本を家庭に持ち帰ってもらい、読書を生活の一部として続けてもらうことを促進しています。

地域の力で支えるボランティアの存在

この事業を支えているのは地域のボランティア。地元の「羽



曳野市子ども文庫連絡会・おはなしの森」に所属するボランティアの方々が協力して、地域全体で子育てを支えるネットワークを築いています。ボラン

ティアの一人、前田泰恵さんは言います。「読み聞かせをしていると赤ちゃんが、自分に語りかけてくれているのがわかるんですね。じっと見つめて笑顔を見せてくれるんです。絵本を読み聞かせることの「言葉がけ」の大切さを身をもって感じます。」

また、ボランティアの菅谷純子さんもこう語ります。「この活動を通じて地域とつながり、保護者の方と直接会って話すことができるこの時間は、何ものにも代えがたいものです。保護者の皆さんに絵本を通して子育ての楽しさ、喜びをお伝えできればと思っています。」

読書習慣の芽生え

参加した保護者からは、「リラックスできる時間だった」「家に帰ってからも読書を続けたい」といった声が多く寄せられています。実際、ブックスタートをきっかけに図書館を利用する親子が増えており、0歳児の図書館利用カード登録者数の増加が期待されます。



藤井館長は、「読み聞かせを通じて、親子の絆が深まり、家庭での読書習慣が自然に育まれていくことが私たちの最大の願いです。この活動が、将来の子どもたちの成長に確かな影響を与えると信じています。」と話します。

本との出会いが人生を豊かに

「本との出会いは、子どもたちの将来に大きな財産になります。早い段階から読書に触れ合うことで、学びの土壌を育み、人生にわたる読書習慣を作り上げて欲しいと思います。」と藤井館長。図書館は、これからも本を通じて、地域の未来を育む役割を果たし続けます。

赤ちゃんが手にした一冊の本。それは、単なる絵本ではなく、未来への扉を開く大切な存在です。地域のボランティア、図書館、そして保護者が手を取り合い、子どもたちに本との素晴らしい出会いを提供している「ブックスタート」。その「ちょっといい」が、未来をつくる力になっていました。



※読み聞かせは、羽曳野市子ども文庫連絡会・おはなしの森とおはなしボランティアグループ「はびきの」の二つのボランティアグループが交代で行っています。

風景に宿る羽曳野の魅力を写真で切り取る

羽曳野写真連盟
ピンボケ写真クラブ
福本勝彦さん

羽曳野写真連盟代表
21・フォトフレンズ
清田清さん

私たちが目にする「絶景」とは、遠くの地平線に広がる壮大な風景だけではありません。身近なまちの景色、日常の風景にも、その土地ならではの魅力が隠れています。写真連盟の清田清さんと福本勝彦さんのおふたりは、まさにその魅力を「はびきの百景」として、写真を通じて再発見し私たちに伝えてくれています。おふたりの「はびきの百景」に込められた想いと活動に迫ります。

「はびきの百景」 — 自分たちのまちの魅力を再発見



福本さんの作品

羽曳野写真連盟の活動の中でも、特に注目すべきは「はびきの百景」をテーマにした写真展です。これは、あらためて自分たちのまちの良さを再発見し、地域に目を向けた活動の一環として始まりました。「遠くの絶景も魅力的ですが、私たちのまちにも美しい風景はたくさんあるんです。」

と語るのは、福本さん。

その言葉通り、羽曳野には自然豊かな景色が広がっています。朝焼けの空、風に揺れる季節の花々、歴史あるまちのたたずまい、そのひとつ、ひとつが見る人に新たな感動をもたらします。特に、古墳と高層ビルの遠望が共に写る風景は、このまちのユニークさを象徴していると言えるでしょう。

写真は物語を語る

写真を撮るという行為は、単なる瞬間の切り取りではなく、物語を伝えることに他なりません。清田さんは、「常に“物語性”を意識して写真を撮影しています。風景には『主役』と『脇役』、そして『背景』があります。これらをどう組み合わせるかが、写真の魅力を引き出すカギです。」と語ります。

そのため、何を見せたいのかを明確にし、余計なものを引き算することで、より鮮明に物語を伝えることを心がけているといいます。常にカメラを携え、身の回りの何気ない風景も切り取る。その瞬間が、どんな背景を持つのかを感じ取り、永遠の一枚にするのです。

スマホ時代の中でのアナログの美

今や、誰もがスマホで写真を撮る時代。しかし、清田さんと福本さんが守り続けているのは、あえてプリントして展示するというアナログ的な手法です。「SNSで完結してしまう時代だからこそ、印刷して展示することで、写真本来の美しさを実感してほしい。」とおふたりは語ります。スマホでの撮影は手軽ですが、あえて大型のプリントを使うことで、写真の持つ圧倒的な迫力や深みを伝えられると考えているといいます。

地域の未来を切り取る

羽曳野写真連盟の活動は、単なる写真の展示にとどまらず、地域の魅力を新たな形で発信しています。その活動からは写真を通じてまちをより良くしていこうという熱い思いが伝わってきます。

“今、この瞬間の景色が未来の宝物になってゆく” どんな時代

でも、まちの魅力はその土地に住む人々の目に宿り、その目線が切り取った風景こそが、まちを愛する力に変わっていくのを感じました。



福本さんの作品



清田さんの作品